

Title	ナポレオン戦争後の恐慌期における労働運動と急進主義運動：ウィリヤム・コベットの時代
Sub Title	Radicalism and working class movement in the period of crisis subsequent to the Napoleonic War
Author	飯田, 鼎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1957
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.50, No.5 (1957. 5) ,p.353(11)- 369(27)
JaLC DOI	10.14991/001.19570501-0011
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19570501-0011">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19570501-0011</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

立するどころか互に有益に補い合うものであり、相互間に関税同盟を結ぶ国々の限られたグループは、それぞれ独立を保持しながら協力関係をのばす国際的諸機構と、共通の利益をめざす仕事の上で、たやすく合流するであろう」との態度を示している。

(注一) 邦訳、スパーク報告「欧州共同市場計画」(貿易と関税、三十二年二月号)三二頁。

(注二・三) 同右、三四頁。

右の言明に関する限り、欧州「共同市場」は封鎖性、排他性を排除して、開放性を主旨としている。しかしまた同時に「理論的には世界規模における貿易の自由化がいかに望ましいように思われても、また共同市場は能うる限り広範囲であることが望ましいものの、真の共同市場は結局は限られた国家群の間でしか実現されぬ」との発言も含まれており、共同市場成立の本来の趣旨から見て、そこには差別性、排他性が窺われなくてもない。

(注) 前掲書、三一頁。

素より報告書序言の言葉のみからして、欧州「共同市場」の将来の在り方を断定することは許されない。問題は現実それが、将来におけるヨリ広汎な範囲での世界貿易の自由化に向っての過渡的過程に属するものか、あるいは地域的な経済結合としての纏りの中に沈潜するものなのかについての判定に懸って来るであろう。そこで厳密には、それが実際の運営において、どのような展開を示すかを見なくてはならない。その意味で、近い将来における「欧州自由貿

易地域」案との調整の如何は、一つの試験と見ることが出来る。

しかしベネルックス関税同盟を母胎とし、E.C.S.C.の発展形態としての欧州「共同市場」が、一概に封鎖的なブロック経済や広域経済圏の再現を意味するとは、簡単に推論しえないものがある。惟うに會てのブロック経済や広域経済圏は、一本国乃至は強大国を中心としたのに対し、欧州「共同市場」は、加盟諸国の対等の立場を原則とする利益共同体である。したがってその実質的内容は、前者においては支配・被支配の關係であったのに対して、後者においては互恵主義であるといえよう。

この本質的差異を根拠として會てのものとは異なった展開を望むことは無謀であろうか。素よりすでに触れたその政治的・軍事的意義の附加から、特殊の性格の保持を予想することも可能である。しかしすべては戦後の西欧が置かれた特殊の事情から胚胎するものであり、その限りにおいて、一つには世界経済のリージョナリズム化の動向に即応しつつ、二つには西欧の生産力の発展に即しての、一つの必然的な発展のプロセスと解釈したい。したがって究極における世界貿易の自由化とか、世界の単一市場実現とかへの過渡的形態とまで考へる要はないとしても、最近の世界経済の動向に即しての西欧としての現実的適応の姿として、これを把握して差支ないであろう。

## ナポレオン戦争後の恐慌期における

### 労働運動と急進主義運動

——ウィリヤム・コベットの時代——

飯 田 鼎

- 一、ナポレオン戦争後の恐慌の意義
- 二、都市および農村における労働者階級の窮乏化と急進主義運動
- 三、陰謀、弾圧そして虐殺
- 四、その後の抵抗と失敗の原因

「ウォーターローに戦闘が行われたとき、イングランドの農村は、なお汚れない美しさのなかにあり、大抵のイングランドの都市は見事な絵のようであった」。トレヴェリアンは、十九世紀初頭のイギリスの農村についてこのように描いているが、しかしこうした表面の平和の背後に、資本主義イギリスにとって、まことにおそれるべき事態が進行していた。「大戦はかなり長くつづき(四半世紀になん

ナポレオン戦争後の恐慌期における労働運動と急進主義運動

んとしていた)、英国の人々は戦時の社会状態にあった。イングランド銀行券が法貨となるとともに、この交戦状態は、たえずつづきうるものとなった。そして国家は、大戦中、年々してきたごとく、一年と急速度に富を増加しつづけるわけだったのだ。突如、富の消費者たる大戦はやみ、内外を通じて実は大規模であった大戦の消費需要もばったりととまってしまった。そしてこれが当時のいわゆる戦争から平和へのはげしい変化をうんだのだ。この新しい国民的な事態(けだしそれは、諸国民の歴史でもはじめてのことだったから)は、当代の政治家をおどろかし、ろ、う、ばい、させた。そして彼等は、あたりを見まわしては、どこからの救いの手を求めた。

ナポレオン戦争後、突如としてイギリスをおそった恐慌を身をもって体験したロバート・オーエンは、以上のようにその自叙伝のなかでのべているが、さらに、その恐慌の深刻さについてつぎのよう

に説明している。「この明らかにいふかき窮乏の原因は、かくも長い大戦の間におこった新たな異常な諸変化に存すると私には思われる。大戦中は、あれほど長い期間、あれほどひろい規模で、わが陸海軍の消耗に供するため、人も物資も四半世紀の間、あれほど焦急に需要されてきたのだ。いかなる物も戦時値段をえ、しかもそれがずいぶん長い間持続されて、そのためそれがまるで現代には実業の自然の状態のように見えた。手や物資の欠乏は、このおしげもない出費とあいまって、戦争の目的に必要な物資——そしてこれらは直接間接無数であった——の供給において、筋肉労働に代るべき新たな機械の発明や、化学的発見にたいする需要をつくり、それらに大きな奨励をあたえたのである。大戦は、農業家、工業家その他の富の生産者にとっては、すばらしい、もっとも金使いのありがたい一顧客であった。そしてこの時期を通じて、大抵の者がひどく金持になったのだ。大戦の最後の年の経費は、この国のみで一億三千万ポンド、すなわち、平時の経費をこえる八千万ポンドにのぼった。そして平和が締結されたその日に、生産者のこのすばらしい顧客は死んだ。需要が減じたので物価も下落し、大戦には必要であった貨物のごときは、その原価すら回収しえないほどになった。穀物倉や農場の庭はいっぱいになり、倉庫はあふれ出した。そしてそれがわれわれの社会の人為的な状態であって、この富の大過剰こそは、現在の窮乏の唯一の原因なのだ。焼け、農場の庭や倉庫の在荷を。そうすれば繁栄は立ちどころに再開する、まるで大戦がつづいていると同じよ

うに……」<sup>(3)</sup>(傍点筆者)。オーエンはすでにこの当時、資本主義社会のもつ本源的な矛盾として、恐慌を理解していたようである。彼がのちに、世界における最初の偉大な社会主義者として、社会主義運動や労働組合運動に活躍するようになったのは、この生々しい体験を通じてであったといわれている。

この一八一五年後の恐慌は、実にイギリス資本主義にとって、最初に発生した生産過剰にもとづく恐慌であり、その影響は、イギリス一国にとどまっただけけれども、その深刻なことで最初におこった大規模なものであるという点で記憶されなければならない。それから、ほとんど十年毎に大規模な恐慌が週期的にイギリスを中心とするヨーロッパをおそったのであって、一八二五年、一八三六年、一八四七年と、そのたびに、悲惨な経済的な破局と困窮とが、主として労働者および農民の生活をおびやかす、それにつれて労働者階級の運動もまたはげしくなっていたのである。

ユルゲン・クチンスキーは、十八世紀の半ばから、フランスとの戦争に入り、間もなくアメリカ植民地との戦争、そして更に一七九三年から一八一五年までの二十余年にわたる戦争の最中に、しかもヨーロッパ向けの輸出が、いちじるしくせばめられたとき、イギリスがその生産力の巨大な発展をなしたことは、おどろくべきことであるといっているが、それだけにまた、このあまりにも長い戦争によって、もっとも多くの犠牲を強いられた勤労者大衆が、平和を待ちのぞみ、平和がおとずれさえすれば、再び繁栄が彼等の手に

もどってくるだろうと考え、また彼等の生活も戦争中よりも、少なくともよくなるだろうと想像したのも無理ではなかった。

すぐれた経済学者として、当時すでに高名であったデーヴィッド・リカードは、戦後に来襲するであろう大不況を予知することができず、一八一五年六月二七日付のマルサスあての手紙のなかで、つぎのようにのべている。

「ナポレオン・ボナパルトは打ち倒されましたので、平和をさまざまにたがっている障害が、とりのぞかれる希望がわいてまいりました。そしてわたくしたちは、とうとう、わたくしたちが流したすべての血とあらゆる富にたいして、長期間の安静をもって報いられるでしょう——そしてこの時期こそ、疑いもなく繁栄の長い時期であることがわかるでしょう」<sup>(4)</sup>と。

なるほど平和はやってきた。だが、イギリスとフランスとの間の長い戦争はやんだけれども、その結果、イギリス国内に、あたらしいはげしい闘いがはじまった。そしてこの不況が次第に深刻となるにつれて、窮乏化が労働者大衆の生活を今までよりも一層苦しめていったのである。

注(1) G. M. Trevelyan; English Social History, A Survey of Six Centuries Chaucer to Queen Victoria, 1946. 林

健太郎訳、下巻七二頁。

(2) Life of Robert Owen, written by himself, 1857.

ナポレオン戦争後の恐慌期における労働運動と急進主義運動

本位田祥男、五島茂共訳、上巻二二九—二三〇頁。

(3) 前掲書、二二二—二二三頁。

(4) Jürgen Kuczynski; Die Geschichte der Lage der Arbeiter in England von 1640 bis in die Gegenwart, 1954, S. 25.

(5) ボナー編「リカードウからマルサスへの手紙」岩波文庫、中野訳、上巻一六一頁。

二

一八一五年の恐慌が、どのような深刻な影響をあたえたかについて、ユールはつぎのようにのべている。「商業においては熱病的に投機的な輸出がしばらくつづいたので、外国市場はたちまち購買資金が欠乏して供給過多におちいり、その後はいままでにはいはいはげしい暴落がおこった。農業賃金ば飢餓水準よりはるか低くまで引き下げられ、労働者は救済をうけるため、大量に救貧法に追いやられた。工場は、つきからつきへと閉鎖され、労働者は仕事から投げ出された……」<sup>(1)</sup>と。このように、困窮は農村地帯においてとくにいちじるしかったことは注目されなければならない。

農業恐慌のきざしは、すでに戦争中からおこっていた。一八一三年と一八一四年の間に連続的な不況がはじまった。ナポレオン戦争が終ると、一八一三年頃には、一クォーター—一八シリングから一二〇シリングの高値を示していた小麦が、七六シリングと暴落した。

これにおどろいた政府は、その年に、小麦の値段が八〇シリングを下まわった場合には、外国からの小麦の輸入を制限する法律、いわゆる穀物法を通させたが、しかし凶作になると大量の小麦が輸入されたため、小麦の価格は上らず、それどころか豊作ともなれば、小麦の値段は更に下落しなければならなかった。そして、一八二二年には五三シリングとなり、その年の八月には四二シリングという未曾有の暴落を示した。そしてそれは、一八一五年から一八二〇年にかけての、小麦の値段の高かった頃の、約半分、もしくは三分の一でしかなかったのである。これが農民に破壊的な影響をあたえたことはいうまでもない。

この当時、田園を騎馬旅行をして歩いた農民出身の労働運動指導者ウィリヤム・コベットは、この時代の農村のあれはた状態について、いきどおりながら、つぎのように書いた。「まずしくみじめな地位におとされた農民、下落した、あるいは支払われない地代、かつて耕された高地や荒地は、また再び自然のままに放っておかれ、その国の人口は少なくなり、労働者は窮民におちていった……」<sup>(3)</sup>と、このナポレオン戦争直後の恐慌の結果おこったおそるべき窮乏については、多くの書がふれているが、とりわけその当時のアニユアル・レジスターには、比較的くわしく記録されている。すなわち、

「今や困窮が、土地の耕作者たちの間に、いろいろなちがったたちであらわれた。そして人々の不満は、凶作のために貧しい人々が飢えの危険にさらされていることである。その年(一八一六

年：筆者注)のくれる前、暴動が数カ所で勃発したが、それは、市場の突然の値上りによってひきおこされたものであった。しかしながらそれらは、一時的な騒動にすぎなかった……」<sup>(4)</sup>と、またそのときおこった暴動については、更につきぎのようについている。

「下層の人々の間の不満は、定期的な仕事がないことや、或いはまた賃金が下落したためにおこったのだが、最初にノーフオルク、ハンティンドンおよびケンブリッジで、脅迫的な様相をおびはじめた。すなわちそこでは、夜の会合が開かれ、おどかしの手紙がおくられたり、家、穀物倉、稲むらなどは火をつけられたりした……」<sup>(5)</sup>。

また都市の労働者の不満の爆発については、鉄製造業の場合にもっともはなはだしかったといわれる。戦争中は異常の好景気に酔っていた鉄製造業は、その終結とともに深刻な不況に見舞われた。多くの大工場は突然閉鎖され、その産業に従事していたいろいろな職種の労働者は街頭になげ出された。とくにスタフォードシャーの南部は、この影響をもっとも強くうけたところであった。しかしながら、それはそのままではすまなかつた。鉄製造業の不況は、ただちに、これと密接な関係にあった石炭業に波及し、炭坑労働者の失業も増大した。彼等は、石炭をいっぱいんだ車をひいて遠い町にゆき、あわれみを乞うとともに、方々に陳情のデモをおこなった。アニユアル・レジスターは、当時の模様をつぎのように描いている。

「これらのさまよい歩く陳情の群れの一部は、首都ロンドンに近づいた。だが彼らの前通は、当然、警官に邪魔された。それは、彼らがそういう恰好では、暴動をおこすかもしれないという心配からであった。そこで彼らは、訓戒され、心づけをもらって帰されたのだった……。とくにサウス・ウェールズの大工場地帯では、マーサー・ティドヴィル (Merthyr Tydfil) という、職を失った労働者の大きな団体が、騒々しいやり方で集まり、軍隊が介入するまでは、正常な秩序に復しなかつた」<sup>(6)</sup>。

このような農村および都市における暴動については、多かれ少なかれ、大抵の労働運動史にかんする書物には記されているが、ハモンド夫妻の「農村労働者」は、とくにくわしくふれている。要するに一八一五年から一八二〇年頃までは、イギリスの労働者階級にとって、まことに危機の時代であった。労働者階級の意識は一般に低く、また労働組合は団結禁止法によって禁止されていた。そのため不況がおとずれるたびに、農業労働者の生活も、都市労働者の生活も飢餓水準におし下げられ、危機にひんするのであった。ここにおいて、イギリスの労働者階級は、彼らを指揮し、反動的な保守勢力の暴力に対抗し、労働者の権利をまもる指導者を必要としていた。反動的な政府の弾圧に抵抗し、労働者階級を教育して、彼等の眼を政治に向けさせ、腐敗した権力政治を打破しようと努力した指導者は、ウィリヤム・コベットであった。

ウィリヤム・コベットは、一七六三年、サレー州のファナーナムの

ナポレオン戦争後の恐慌期における労働運動と急進主義運動

農業兼旅館の比較的ゆたかな家に生まれた。コベットが子供であった頃は、経済的な大変動は、まだこのサレー州の片田舎には及んでいなかった。したがってそこでは、今まで二百年もの間つづけられたと同じような生活様式が依然としてのこっていた。すなわちたくさん土地をもっていた大地主や自由土地保有者と呼ばれた農民、そして小作人や小屋住みなどいって、彼等はまた共有地で、牧畜や伐材の権利をもっているという、いわば牧歌的な平和な生活がいとなまれていた。だがすべては変わりつつあった。田園の美しさは次第に失われ、素朴な農民の間の感情もきえうせ、古くから地主と小作人を結びつけていた恩顧関係に代って、ろこつな階級的利害の対立があらわれてきた。コベットはのちに労働運動の指導者となつてからも、自分が去ってきた生まれ故郷を、伝統と平和の土地として想い出したのである。この意味で、彼は、いわば懐古主義者であり、彼の急進主義は、今は失われた「美わしきイングリランド」のロマンチズムの上に立っていた。

一八一六年五月、イングリランドは不穏な空気につつまれていたとき、「空腹は、いつ理性のいうことに、耳をかたむけたであろうか」と叫び、十一月には、「職人および労働者への呼びかけ」(Address to the Journeymen and Labourers) というパンフレットを書き、そのなかで働く者の希望は、騒動をひきおこすことにあるのではなく、議会の改革にあるということ、労働者に語ったのであつて、<sup>(7)</sup> ほぼ同じ時代に生きたロバート・オーエンの社会主義や、トー

マス・スペインスの土地社会主義とは、その主張において非常に異なっていた。彼はその「職人および労働者への呼びかけ」のなかで、つぎのようにいっている。

「われわれがいま生活している時代は、危険にみちている……われわれの現在のみじめさの原因については、それは、政府がその軍隊や閑職者、年金生活者その他の人々、そして更に政府の負債の利子の支払いのために、われわれに支払うことを強制する巨額の税金である……。労働者や職人たちは、実際これらの旦那方や貴婦人の子供たちを養うために税金を支払っているのに、これらの無情な横柄な人たちは、労働者や職人が救助をうけてはならないし、また彼らが子供を生むことは制限すべきであると主張するのだ……」

これを救う道は、まったくただひとつしかない。それは、直接税を支払っているすべての人に、選挙権をあたえ、議員を年々選挙させるような議会下院の改革である……」<sup>(10)</sup>

コベットは労働者階級を窮乏におとし入れた大きな原因が腐敗した議会政治であり、この議会を改革することなくしては、労働者階級の向上はありえないと主張したが、彼はオーエンのように、労働者大衆を苦しめている不況の原因が、現実の資本主義体制にあるとは考えなかった。議会制度さえ改革されたならば、労働者は充分にその権利をうけることができると考え、労働者階級は、その一切の力を結集して、何よりもまず選挙法改正のために、努力をつづける

べきであると絶叫した。

このような彼の努力は、結局のちに一八三二年の選挙法改正のため、いわば序曲にすぎないのだが、これについては、のちにあらためて論ずることとして、要するにコベットは、議会改革運動に専心したけれども、経済的な要求をかかげた労働者の組織的な抵抗運動には、あまり好意をもたなかった。すなわち彼の当面の目標は、まず労働者階級を政治的に教育することであって、例の「職人および労働者階級への呼びかけ」を書いて以来、ついにポリテイカル・レジスターという機関紙を発刊した。これはのちに、彼の敵から、「二ペンスのクズ」と罵られたが、猛烈な売れ行きを示し、労働者にたいする政治的な啓蒙宣伝の機関として大いに役立った。しかしながらこの新聞に寄稿したコベットおよびその同志たちは、無秩序な暴力は無効であるとのべ、さきほのべたように、その当時各地にはげしくわき上っていた労働者階級の、追いつめられた蜂起に同情を示しながらもこれを否定し、その原因を理解することができなかったところに、急進主義者としての彼の限界があらわれているのではないだろうか。

もとよりこの当時、急進主義者として活躍していた者は、コベットひとりではなかったのであって、われわれはさらにサミュエル・バムフォード (Samuel Bamford) とヘンリー・ハント (Henry Hunt) をあげることができる。バムフォードは、ランカンシア出身の織工であり、また詩人でもあった。彼は早くから労働運動に関

係し、その自叙伝「急進主義者の生涯における出来事」(Passages in the Life of a Radical) は、初期の労働者階級の運動を、もつとも生き生きと語った物語りであるといわれるが、彼はそのなかで、つぎのようにのべている。

「一八一五年に穀物条令がはじめて制定されたときに一連の騒動がはじまり、みじかい間において、一八一六年の終りまでつづいたということは、歴史のひとつの問題である。ロンドンやウェストミンスターでは、暴動がつづいておこり、しかもその穀物条令が議論されている間に、七日間もつづいた。ブリッヂポートでは、パンの値段が非常に高くなったため、暴動がおこり、ピッドフォードでは、穀物の輸出をさまたげようとして、同じような騒ぎがおこった。ペリでは失業者が機械をうちこわそうとして暴動がおこり、イリーでは血を流してようやく鎮圧された。ニューキヤスル・オン・タインでは炭坑夫やその他の労働者が暴動をおこし、ノッチングムでは、ラダイット主義者たちが三十台の編物の摺桿を破壊した。……そして一八一六年十二月七日には、ダンディーで、ひきわりにした穀物の値段が高くなったため、百軒以上の商店が掠奪された。このときにウィリヤム・コベットの書いたものは、急に大きな権威をもつようになった……」<sup>(11)</sup>

このように、戦後の危機の時代においては、コベットらの政治的急進主義者の影響が強かった。だが、コベットやバムフォードやヘンリー・ハントのような労働階級出身の急進主義者とならんで、た

ナポレオン戦争後の恐慌期における労働運動と急進主義運動

たとえば、十八世紀末期からのブルジョア急進主義であったジョン・カートライトの名も忘れてはならない。カートライトらのいわゆるハンブデン・クラブ (Hampton and Union Clubs) は、すでに一八一二年に、長い戦争の惨禍と、トリー党政府の失政に不満を、人民を代表して、改革を獲得しようとするに、きびしく制限することが、このクラブの決議である」という綱領からも明らかのように、労働者階級の運動に特別の関心をよせてはいなかった。しかしながら、いずれにしても一八一五年からはじまった不安な情勢は、一八一六年になっても衰えず、一八一七年に入るや、ますますはげしくなった。とくにコベットらの運動とともに、トーマス・スペインスの土地社会主義者たちの活動が目立ってきた。スペインスの土地社会主義は、要するに困窮運動によってもたらされた農民のみにめな状態に刺戟されておこった運動であって、その根底に横たわるものは、博愛主義であった。

アダムが耕し

イヴが紡ぎしとき、

誰ぞ紳士なりしぞ

中世の社会改革家ジョン・ボールの詩は、まさに「自然状態にさえれ」という彼等の主張と一致していた。

以上において、ナポレオン戦争直後の危機の状態において活躍したコベットやバムフォード、そしてスペインス主義者などの労働者階

級の急進主義についてふれたが、しかし労働者階級を基礎とする急進主義運動というものは、決してこれらにとまらなかつた。わたしは更にいきて、これらの急進主義運動をたゞして、この政府が、どのような態度をもつてのぞんだか、その陰謀の巧妙とその弾圧の残酷をたゞよって、イギリス労働者階級の心に刻みこまれたとされるいくつかの事件についてふれてみよう。

- (1) G. D. H. Cole; A Short History of the British Working Class Movement, 1948, 林健太郎訳「一巻七十頁」。
- (2) W. Hasbach; A History of the English Agricultural Labourer, 1908, p. 179.
- (3) Adolf Held; Zwei Bücher zur sozialen Geschichte Englands, p. 299.
- (4) The Annual Register, History, Politics and Literature, for the year 1816, p. 93.
- (5) *ibid.*, p. 93.
- (6) *ibid.*, p. 94.
- (7) Hammond; The Village Labourer, pp. 150-153.
- (8) Margaret Cole; Makers of Labour Movement, 1948, p. 24.
- G. D. H. Cole; The Life of William Cobbet, 1927, p. 14.

われわれは、特別の恐怖心をもって、その組織的な制度を考えているのです。煽動的な人たちは、人の心をあおりたてるような論文やパンフレットをひろくまきちらすことによって、彼等の企てをおしすすめるために、この組織的な制度を考え出したのです。これらのなかには、われわれの聖なる宗教の尊敬すべき形式にたいする不敬な諷刺文もあります。それは、すべての者から神をおそれる心、王を尊ぶ心、法律を守る精神を根こそぎにするものなのです<sup>(1)</sup>と。

当時の保守党政府は、何とかしてこの危険な運動をおさえつけようとして、その機会をねらっていた。そしてスペンス主義者の会合は、支配者たちをおどろかしたが、また弾圧の口実をあたえた。

スペンス博愛主義者協会 (Society of Spencean Philanthropists) は、偉大な土地社会主義者トーマス・スペンスの死後つくられたものであって、一八一六年の十二月二日スペンス主義者たちは、ロンドンのスパ・フィールズで、会合をもよおした。かねて、スペンス主義者を蛇蝎のごとくにきらい、弾圧しようとしていた政府は、ここに絶好の機会を見出した。招かれて主賓となったヘンリー・ハントは、このスペンス主義者たちの社会主義的な綱領には必ずしも賛成しなかつた。彼はウィリヤム・コベットと同じく社会主義者ではなかつたので、かえって急進主義のために演説をした。このスペンス主義者の暴動について、当時の政府がどんなに恐怖をいだいたか、一八一七年の議会の秘密委員会 (the Committee of Secrecy)

ナポレオン戦争後の恐慌期における労働運動と急進主義運動

- (6) *ibid.*, M. Cole, p. 33.
- (9) History in the Making, edited by Dona Torr, From Cobbet to the Chartists, vol. 1, pp. 36-37.
- (11) G. D. H. Cole; British Working Class Movement, select documents, p. 121.
- (12) A. L. Morton and George Tate; The British Labour Movement 1770-1920, A History, 1956, p. 20.
- (13) Cole; select documents, p. 119.
- (14) Cole, *ibid.*, p. 141.

III

急進主義運動の先駆者のひとりトーマス・ジョナサン・ウーラ (Thomas Jonathan Wooler) は、一八一七年政府の政策を諷刺的に痛烈に批判した新聞「黒い小人」(Black Dwarf) を発刊したが、そのなかで、支配者の労働者や急進主義者の運動にたいする態度について、リーズの治安判事および住民の宣言を通じてつぎのように書いた。

「われわれは、一般の集会をひきおこし、政治的なクラブをつくるようにすすむ、そのようにして無知な人たちや無学な人たちをして、彼等の支配者を批判させることによって、しっかりとした形をとっている政府に、不満をおこさせようとする邪悪な企てを、非常にくしみをもってみています……」

の報告書には、「このときに、計画的な蜂起は、あたかもフランス革命を象徴していた」といわれているように、これが支配階級にあらえた衝撃は相当に深刻なものがあつた。陰謀はいたるところにはりめぐらされた。そのためには、スパイによってこの運動を壊滅させようとすることも辞しなかつた<sup>(3)</sup>。この大会においてウァトソン博士父子、プレストンやスイツスルウッドなどのスペンス主義者がとらえられ、しかも、政府はこの事件に直接関係ないウィリヤム・コベットやヘンリー・ハントのような大立物をも、何とかして罪におとしめようとして、あらゆる努力を払った。プレストン等は、すぐ無罪となつたが、それは、サー・チャールス・ウエゼレルが、政府側の第一の証人をスパイだと暴露して、弁護したおかげであつた<sup>(4)</sup>。

一八一七年、議会はスペンス主義者として或いはスペンス主義博愛家として知られている人々のクラブや協会を抑圧するため、ひとつの法案を可決した。その理由は彼等が、土地の没収ならびに平等に土地を分割すること、国債の支払拒絶とを目的としたから——それと同時に、議会は、政治団体間のすべての交通を禁止した通信協会条令を復活させた。かくしてスペンス主義者の暴動は鎮圧されてしまった。のちにスパイ、エドワーズの計略にかかつて、四人の指導者とともにニューゲートの断頭台上に露と消えたスイツスルウッドは、その後もスペンス主義者として活躍し、政府のとりしまりがきびしくなるにつれて、その手段も平和的であるよりはむしろ暴力的となつていった。

急進主義運動を壊滅させようとしていた政府は、スペイン主義者の暴動を機会に、弾圧を一層強化しようとした。一八一七年一月、ついに議会は公衆集會を禁止する特別な権限を治安判事にあたえ、いわゆる人身保護令が停止され、そのために急進主義者は、いつ突然逮捕されるかも知れぬという危険な状態となった。この人身保護令は、一七九四年から一八〇六年のフランスとの戦争のとき以来のことであった。一八一七年二月二十四日、シドマウス卿によって人身保護令停止の動議が上院に提案されたが、この提案理由については、一八一七年のアニユアル・レジスターに、つぎのように記されている。当時の支配階級の狼狽ぶりをうかがうことができる。

「まず第一に、現政府をくつがえすために、叛逆的な通信が首都ロンドンで行われているということは、委員会（上院秘密委員会のこと：筆者注）にとって、もはや疑いありません。つぎに第二に、委員会は、この種の計画は、首都にかぎらず、もっとも人口の多い工業地帯へ、広はんにひろまってゆこうとしていることを、充分な確信をもって、報告致したいと存じます。第三に、こういう状態が、もっともさしせまっておおるべき害悪を、何とか処理しないで、ずつとつづいてゆくことは、とても我慢のできないこととあります」と。

わがウィリヤム・コベットはこのとき、政府の目的が彼をとらえ、彼の新聞、ポリティカル・レジスターをおさえることであると考えたので、アメリカへ逃亡したが、他の急進主義者たちはその立場を

まもり、彼等の運動は成長していった。

しかしながらこのような一方的な弾圧だけでは、大きくのびようとしていた大衆的な運動をおさえることはできなかった。三月には、ランカンシア出身の主として手織工からなる失業者たちによって、議会議改革と貧困の救済を要求する陳情書を提出するためにロンドンへゆこうとする計画がくわだてられた。数千人のこれらの困窮者たちは、マンチェスターに集まったが、軍隊の攻撃をうけ、一部の人はストックポートまで、きわめて勇敢な少数の人々は、ダービシア州のアッシュボーンまで行進したが、たびたび軍隊の攻撃にあつて分裂してしまつた。これがのちに、「毛布党の行進」(The March of Blanketeers)と呼ばれたのは、彼等がオーストラリアの放浪者にならつて、ぐるぐると巻いた毛布をたずさえていたからであつたといわれている。

急進主義者や労働者階級の運動にたいする政府の弾圧が、非常にきびしくなればなるほど、大衆の運動は地下にもぐり、指導者にたいする処刑がざんこくになればなるほど、革命的暴力的にならざるをえなくなつた。あらゆる抵抗と抗議の方法が封じられるや、急進主義者たちは武力行動を計画し、武装蜂起のための訓練を、ひそかに人里はなれた荒野で行おうとしていた。いうまでもなく、このようなくわだては、小規模な局地的なものではあつたけれども、政府当局をいたく刺戟したであろうことは想像にかたくない。

ここにおいて政府はこれらの企図を未然に粉碎し、壊滅状態にお

としいれるために、スパイを放つたのである。さきにのべたスペイン主義者スイツスルウッドのごときも、スパイ、エドワードの手にかかつて、キャトウ街陰謀事件にまきこまれてしまつたのであつて、これらのスパイは政府と密接な連絡をとり、指導者にちかづいてこれをあざむくことを任務としていた。このように労働運動や急進主義を壊滅状態におとしめようとして行われた陰謀は、ひとりイギリスだけでなく、あらゆる国の歴史に数多くみられたところであつて、わが日本もその例外ではない。しかしながら、この当時のイギリス政府当局の陰謀は、あきらかに内務省のスパイによるものであることが、やがて明らかにされたのだ。

主として北部でスパイ活動をした悪名高いオリヴァは、その典型的な人物であつた。彼のやり口は、各地を歩きまわり、中央の革命的な党派の代表者と称して人々を安心させ、改革者たちのグループにちかづいた。そして、他のところでは武器が供給されているとか、或いは大勢の人々が武器をとつて起ち上ろうとしているとか、その他の方法によって巧みに煽動し、途方もない事件を勃発させて、その指導者を逮捕させるといふ、きわめていんげんなものであつた。スパイ、オリヴァの犠牲となつたダービシア出身のすぐれた指導者は、靴下製造工ジェレミア・ブランドレス(Jeremiah Brandreth)であつて、彼はオリヴァの陰謀によって三、四〇人の労働者をひきいて、いわゆる「ダービシアの叛乱」をおこしたが、まもなく捕えられ、十九人は流刑に処せられ、ブランドレスと他の二人の指導者

ナポレオン戦争後の恐慌期における労働運動と急進主義運動

はノッチンガムで処刑された。

だがいかなる陰謀も弾圧も、労働者階級の運動の発展をはばむことはできなかった。労働者大衆の生活の苦しみの原因が資本制社会そのものの中にあり、戦争のために窮乏化が一層はげしくなつたことを、当時の労働者階級が理論的に把握したとは考えられないけれども、イギリス全土にみながる飢餓の様相、しかもこの危機な状態にたいしてなんら適切な処置をとらない政府の無情な態度にたいして、はげしい怒りがわきおこらないわけにはゆかなかつた。一八一八年から翌一八一九年にかけて失業がひどく、ランカンシアとヨークシアでは再びラダイットの運動がおこつた。一八一八年には繊維工業地帯に大ストライキがおこり、指導者はとらえられ、不穏な空気がみながつていた。

一八一八年七月十六日、ランカンシア州の治安判事は、シドマウス卿にあつて、つぎのような報告を提出している。

「われわれ、チェスター州ストックポート地区の治安判事は、閣下に、つぎのことを御通知申し上げる自由を有するものです。すなわちそれは、昨日この、主として機械織機というもので働いている労働者の間におこつた騒動についてでございますが、それはどうみても、またくりかえされそうな様子だからでございます。

この騒ぎの原因は、より多くの賃金を要求する一般的なストライキに帰せられるのでありますが、しかし労働者のはげしい憎しみは、いまのところ、トーマス・ガーサイド氏の工場にかぎられ

ています。彼の織工たちは、想像されますように、町やその近くののりの者といっしょになって、もし彼等の賃金が五〇%ほど値上げしないならば、その仕事をやめてしまふつもりであるといふいつもの通告をいたしました……」

とのべられているとおり、苦しい生活にいつめられた労働者たちが、暴徒化するための条件は、充分とのえられていた。そして団結禁止法のもとにおいて、秘密結社となった多くの団体のうち、「博愛主義者ハーキュリス」などが、これらのストライキを指導したものと考えられる。その指導者ジョン・ガースト (John Gast) は、ロンドンの船大工であつて、労働組合を職種のわくをこえた全国的なものにしようと考えていたが、団結禁止法のもとでは不可能であつた。この試みは、のちにジョン・ドハーテオによって試みられ、やがてロバート・オーエンによって労働組合全国大連合として実を結んだことは周知のところである。とにかくジョン・ガーストとその機関紙「ゴーン」の啓蒙的な力は大きかつた。

だがこの当時、労働者階級の力は、相対的に必ずしも強いとはいへなかつた。ウィリヤム・コベットやヘンリー・ハント、或いはまたサミュエル・バムフォードにしても、労働者階級出身の指導者であつたけれども、彼等の眼は労働組合運動そのものにはむけられていなかった。なぜなら彼等は、労働者階級のあらゆる問題は、政治的な改革運動によって解決できるという信念によって行動する急進主義者であつたからである。もとより彼等は、フランシス・ブレイ

スのような、中産階級の急進主義者ではなく、あくまでも労働者階級の利害にもっとも深い関心をいだいた指導者たちであつたけれども、依然として彼等の心を支配していたところのものは、労働者階級によるたくましい組織であるよりは、上からの彼等がたいする説得と政治的啓蒙であつた。指導者による労働者大衆にたいする説得と啓蒙、彼等の政治的な自覚、そして政治的改革運動、その結果としてえられるであろう普通選挙権こそが、彼等の唯一の目標であつた。しかしながらこのような政治的改革運動は、労働者階級の経済的条件の維持改良を目的とする労働組合運動を背後にもつてはじめて、強力なものとなりうる。団結禁止法によっていためつけられた労働組合運動は、この急進主義運動と並行することは到底できなかった。ここにこのナポレオン戦争後の労働運動の悲劇性がある。そしてこの二つの運動の不均等な発展がもたらした結果は、やがて一八三二年の、いわゆる選挙法改正によって、拡大された形であらわれ、労働者階級は選挙権をあたえられず、「裏切られた改革」として大きな幻滅を味あわされるのである。

団結禁止法によって、その生活を擁護すべき武器をうばわれ、あえて組織的な運動をすれば、たちまちにして警察と軍隊によって弾圧され、投獄あるいは流刑の憂き目にあわされるとすれば、労働者大衆のとるべき手段は、請願と陳情によってよりよい生活を保証するよりよい政治を、政府に訴えるほかはなかつた。こうして、一八一九年八月十六日、マンチェスターの聖ピーター広場において、労働

者階級によって、議会改革を要求する大規模な大衆示威運動が開かれたのである。この時の示威運動が、のちにイギリス労働運動史上忘れがたい記念碑ともなったピーターの虐殺となることを、これに参加した誰が予想したであろうか。なぜなら、この大衆的な示威運動は、それほど平和的な雰囲気にもちあふれ、およそ暴力的な空気は見られなかつたからである。みずからこの運動に妻とともに参加し、非武装の民衆にたいして加えた官憲の暴行をして虐殺の模様を、はげしい憤りをもって目撃したサミュエル・バムフォードをして、この事件の真相を語らしめよう。

「この集會が、できるかぎり道徳的に効果的であるべきであり、またかつて英國に見られなかつた光景を見せたいという態度であつたことは、時宜をえた方策だと考えられた。われわれはしばしば、これらの集會において、われわれの見すばらしい貧乏じみた外見、すなわちわれわれの議事進行の混乱や、われわれが動員したあの乱民のような群集などについて、言論機関からののしられたものである。しかしわれわれは、少なくともかような反響はうけまいと決意していた。従来われわれが見られなかつたような清潔、冷静、礼儀などを誇示することによって、われわれの政治的反対者の酷評をやわらげようと、われわれは決定した。

手みじかにいえば、われわれが、われわれ自身を尊敬することや、善良なイギリス人がつねにやつたように、同時に相手の意見をも尊重するということや、集會において、われわれの権利をい

ナポレオン戦争後の恐慌期における労働運動と急進主義運動

かに行使するかを知っていることを示すならば、彼等の尊敬はかちえられるであろうと考えた」と。

このように、きわめて平和的に、秩序正しく、労働者の行列は聖ピーター広場に到着した。平和主義を信条していた偉大な急進主義者ヘンリー・ハントが、壇上にのぼり挨拶をおくっていた。すると突如、攻撃がはじまつた。バムフォードは、つぎのように書いている。

「雑音と妙なざわめきが教会の方におこつた。幾人かの人々が、黒人が来たといった。そこでわたしは爪先きで立って雑音がきこえてくる方を見ると、それは騎兵隊の一団であつた。青と白の制服をきて、早足で進んできた。手には剣をもち広場の周囲をまわつて、一列の新しい家の前で、彼等は一列になつて馬をとめた。

集會者たちは彼等を見るやいなや、手をふり好意の叫びをあげた。騎兵隊はそれにこたえて叫び、それからサーベルを頭上でふつた。それから手綱をゆるめ、馬に拍車をかけて突進し、人々を斬りはじめた。『頭張れ』とわたしはいった。『奴等はおれたちに馬でおそいかかるうとして、頭張れ』。そしてわれわれのいるところには、『頭張れ』という叫びがひろがっていった。騎兵は混乱した。彼等はそんなに多くの人と馬とをもつても、人間の密集したなかに侵入することはどうしてできなかった。そこで彼等のサーベルは、何ももっていない上にあげた手や、防ぎようのない頭の間を切りひらくのに使われた。そこから、斬りおとされた手足や傷口のひらいた頭蓋骨が見えた。そしてうめき声と叫びと

が、そのおそろしい混乱の騒音と混合した」と。<sup>(16)</sup>

このようにして、よりよい生活を保証するよりよい政治を政府に訴えるために、平和的に集まった労働者大衆は、かつてない暴行と非道な虐殺をもってむくいられ、そのために十一人が殺され、四百人以上の人々が負傷した。無抵抗な民衆にたいするこの残虐な攻撃にたいして、急進主義者はもちろん、知識人たちもはげしい抗議を行った。労働者階級の運動に大きな関心をいだきながらも、ウィリヤム・コベットやヘンリー・ハントらの労働者階級の急進主義(Working-class Radicalism)に批判的であったフランシス・ブレースも、この官憲の暴挙に憤激して一八一九年八月二〇日ホップハウス卿にあてて手紙をおくったが、その最後はつぎのような文句で結ばれていた。

「マンチェスターの騎兵たちは、少しの間も、事の成りゆきというものを考えませんでした。彼等は人々を斬りたおし、ふみにじりました……。法律は、適当な口出しをしないところから、どんな救済手段もあたえてはくれません。もし人民がひとりひとりその敵を射ち殺し、彼等の工場を焼きはらうことによって救済をもとめるとしても、わたくしは少しもおどろきませんし、またひどい侮辱をうけたとも思いません」<sup>(17)</sup>

また哲学者として、当時のイギリスの状況に深い危惧と絶望をすら感じていたトーマス・カーライルは、その著「過去および現在」のなかでつぎのように慨嘆している。

しなければなりません……われわれは今までに暴力の方向に進んだことはありませんでした。われわれは今まで公正なそしてしっかりした議論によって、われわれの権利を維持してきました。ところでわれわれは、どのように報いをうけたでしょうか」と。そしてつづけて六法を制定した政府の不当な処置を攻撃し、つぎのように結んでいる。

「これが、わが国民が今までに経験したもっとも長い、もっとも金のかかった戦争の終りの状態なのです……しかもそれは、われわれに千回以上も、永続的な平和、独立そして自由をあたえる約束したその犠牲のむくいであるのです！われわれは、イングラント、スコットランドそしてアイルランドの自由を確保するため、闘っているのだと教えられました。それなのにこれが報酬なのです、これが慰めだということです。これは戦争のもたらしたものだということです……しかしながら、絶望は決してよいものをもたらしません……わたくしは、六法のあとにまだわれわれにのこされているあらゆるものを活用してゆきたいと考えています」<sup>(18)</sup>

弾圧につぐ弾圧にもめげず闘いぬこうとするコベットの語調のなかには、先覚者たちにもすればともないがちな悲愴感、ほとんどみられず、むしろ楽天的でさえある。しかしながらそれは、彼が革命家ではなく、あくまでも急進的な改革主義に終始する合法主義者であったからとはいえないだろうか。ここに、ウィリヤム・コベットを先頭とする急進主義的な指導者たちの限界がある。

ナポレオン戦争後の恐慌期における労働運動と急進主義運動

「汝等言語道断なる州義勇兵たちよ、いかに汝等はその残酷なる武装せる盲目のままに、長刀をきらめかし、馬蹄をおどらせつつ、われらの間におそい来って、汝等の凶猛なる意をたくましくして、われらをなで斬りにしたことぞ。われらの要求、悲惨、虐待の一切にはまったく耳をふさぎ眼をとじ、ただ汝等自身の要求にのみ眼ざとく、機敏であったことぞ！あそこにはあわれむべき顔色蒼白な労働につかれた織工がたおれている。今はもはや不平を訴えはせぬ、婦女子さえもなで斬りにされ、めった斬りにされており、恐怖の叫喚は天にみちている。しかも汝等は得意気に勝ちほこつてのりまわる——汝等言語道断のやからよ、われらにもまた長刀をあたえ、しかしてのち、少しく攻め来れ」<sup>(18)</sup>

セント・ピーターの広場で行われた労働者大衆の示威運動は、当局の非道な暴力によって、弾圧され、それ以後しばらくの間は、政治的改革を要求する急進主義者の運動は、一八一九年の暮に通過した六法(Six Acts)によって、きびしく罰せられることとなった。団結禁止法によって団結をさまたげられた労働者階級は、その政治運動も禁止されてしまったのである。それならば急進主義者たちの運動は減びてしまったのだろうか。いや、彼等は耐えて生きのこった。一八二〇年一月六日、わがウィリヤム・コベットは、そのポリティカル・レジスターのなかで、つぎのように訴えた。

「われわれが非常に長い間行ってきた闘争は、いまや新しい様相をおびています。そしてわれわれは、新しい努力のために準備を

(16) The Black Dwarf, February 5, 1817, quoted in The British Working Class Movement, select documents, pp. 119-120.

(17) Ibid., p. 130.

(18) G. D. H. Cole; Life of William Cobbett, 1927, p. 211.

(19) Cole; Short History of British Working Class Movement, 林健太郎訳、第一巻八〇頁。

(20) Max Beer; History of British Socialism. 加田哲二訳、第一巻一七二頁。

(21) The Annual Register for the year 1817, p. 23.

(22) この日に、キャムルリー卿によって、煽動的集會防止条令(Bill for preventing seditious meeting) が可決された。

(23) A. L. Morton and G. Tate; The British Labour Movement, 1956, p. 43.

(24) Ibid., p. 43.

(25) Ibid., p. 26.

イギリス労働運動史上、最初のスバイは、一七九〇年代にあらわれた。これにまつわるエピソードは面白いので紹介する。ロバート・ワット(Robert Watt)は、叛逆罪のかどで捕えられたが、実はもとは政府のスバイだった。はじめ彼は、スバイ活動をつづけていたが、やがて、自分がスバイするように命ぜ

られていた人々の思想に共鳴し転向してしまった。そして一七九四年、絞首刑に処せられた。

(10) 一八二〇年、スバイの煽動によってひきおこされた関係暗殺の未遂事件。

(11) Morton, p. 43. Cole; select documents, pp. 146-147.

(12) コールは、このときの労働者の数を二〇〇人といっているが、モートンは三、四〇人であるといっている。

(13) A. Aspinall; The early English Trade Unions, Documents from the Home Office Paper in the Public Record Office, 1949, p. 246.

(14) Samuel Bamford; Passages in the life of a Radical, 1844.

(15) *ibid.*, vol. I, pp. 206-207.

(16) いわゆる急進主義者のなかに、大体二つの類型、すなわち中産階級の急進主義者と労働者階級の急進主義者がある。ブレースのごときは前者であり、コムット、ハント、バムフォードらは後者に属する。

(17) Graham Wallace; Life of Francis Place, 1918, pp. 141-142.

(18) Thomas Carlyle; Past and Present, 柳田泉訳、三〇一—三一頁。

(19) 六法とは、(一)治安判事に、違反者を処分するいっそう即決

的な徹底した権限をあたえる。(二)訓練や武器の使用の練習を禁止する。(三)冒瀆的煽動的な誹謗文書にたいする法律を強化する。(四)治安判事に私宅を捜査し、武器を没収する権限をあたえる。(五)集会の権限をさらに制限する。(六)安い刊行物の発行をはむ目的で、急進主義者の発行する定期刊行のパンフレットに新聞税を適用する。

(20) Dona Torr; From Cobbet to the Chartists, 1951, pp. 57-58.

四

ナポレオン戦争直後から一八二〇年頃までの時代は、経済的な大変動の影響をうけて、労働者大衆の生活もおびやかされ、イギリス全体が、不安と動揺におびえた時代であった。この当時、ロバート・オーエンやスペンス主義者たちは、この混乱と窮乏化の原因を理解することができた。しかしながら、労働者階級の運動を指導していた急進主義者たちは、これらの弊害の根源が、腐敗したイギリスの政治のなかにあり、労働者階級の窮乏化の問題はすなわち政治問題であって、議会改革を行うことによってのみ、労働者はその権利を獲得することができるという信念をいだいていた。コベットもハントもバムフォードも、この信念のもとに行動したのであって、彼等の主張そのものは戦闘的民主主義ではあったけれども、社会主義ではなかった。社会主義は、ロバート・オーエンやスペンス主義者そ

してリカードウ派社会主義者たちによって説かれていたとはいえ、労働者階級に大きな影響をあたえるまでにはなっていなかった。いや、労働者階級自体が、まだ階級として形成される途上にあった。社会主義思想が労働者階級にかなりの影響を及ぼすようになったのは、一八三〇年代になってからであって、この当時、彼等の上には指導者として圧倒的な力をもっていたものは、何といっても急進主義者たちであった。

一八一九年のピーターリーの虐殺によって、これら急進主義者たちを指導者とする労働者階級の運動は大きな打撃をうけ、その後の運動は地下においやられた。その結果、労働者階級の運動は突発的暴力的な傾向をおび、弾圧政策に狂奔する保守党政権を、武力をもって打倒しようとする蜂起となった。一八二〇年三月、グラスゴウでは、六万人の労働者がストライキに入り、その影響は各地に波及した。そしてポニーミアの蜂起では、多くの労働者が傷ついた。今にして想えば、この時代は実に労働運動の暗黒時代であった。

二十五年間にわたる弾圧の期間中でも、その反動的政策が酷烈をきわめたのはこの時期であった。しかしながらおおよそ武力的な圧力で、労働者大衆の成長する力をおさえ得たことがあったろうか。なぜなら、資本主義の発展は、プロレタリア階級の量的な増大を宿命として以上、労働者階級は、資本主義がみずから生み出した庶子である。労働者階級の増大にともなって、資本主義は彼等に次第に譲歩を余儀なくさせられる。そしてまた労働者階級は、それを当然の権利として闘いとうとする。団結禁止法の撤廃は、このようにして資本家階級が譲歩しなければならなかったひとつである。しかし、当時の労働者をかりたてた思想が急進主義であるとすれば、社会主義はまだ一部の知識人の頭のなかにあるにすぎなかった。労働者大衆にとって変革の哲学となるべき社会主義の芽は、この激動の数年間に、急速にのびていった。

——一九五六・十一・三〇——